



プレスリリース



画像②



画像③



画像①

古九谷
柿右衛門
鍋島 展

2014年10月4日(土)～12月23日(火・祝)



TOGURI MUSEUM OF ART

戸栗美術館



広報用写真

※本プレスリリース掲載画像①～④の写真データ・ポジフィルムを広報用写真としてご用意しております。ご掲載の際は、別紙の写真借用申請書裏面の注意事項をご覧の上、申請書をお送り下さい。なお、作品画像はすべて戸栗美術館所蔵品です。

■ (表紙) 画像① 色絵 牡丹双蝶文 皿 伊万里 (古九谷様式)

江戸時代 (17世紀中期) 高 4.7cm 口径 35.2cm 高台径 19.3cm

見込に大輪の牡丹の花と、2頭の蝶を鮮やかな色彩で描いた大皿。葉は緑のほかに青と黄色がアクセントとして用いられている。口縁には染付で円圏が施され、外側面には上絵具の青を用いて丁寧な唐草文が描かれている。色づかい、構図ともに古九谷様式・五彩手の典型作である。

■ (表紙) 画像② 色絵 梅竹栗鶴文 皿 伊万里(柿右衛門様式)

江戸時代 (17世紀後半) 高 3.3 cm 口径 15.1 cm 高台径 9.5 cm

柿右衛門様式の完成された姿の中皿。ふちさびで引き締められた画面に、濁手の余白を残して、梅竹、栗、柴垣に集う鶴の図を描く。鶴の羽や草花の表現に柿右衛門様式ならではの細かく丁寧な絵付が見られる。良好な濁手の肌が光を適度に反射して上絵具の色を明るく艶やかなものにしている。裏面は無文で高台内に目跡を1つ残す。

■ (表紙) 画像③ 色絵 蒲公英文 皿 鍋島

江戸時代 (17世紀末～18世紀初) 高 5.6 cm 口径 19.9 cm 高台径 10.9 cm

染付と、赤・黄・緑の上絵具で蒲公英を描いた七寸皿。実際の蒲公英の花は黄色か白だが、この作品ではあえて赤色で表現している。鍋島焼の文様には身近な草花や季節の野菜などに題材を得たものがあり、親しみのある愛らしさを保ちながら、構図・配色ともに見事で格調高い。裏文様は七宝結び文、高台は櫛目文。

■ 画像④ 色絵 山水文 瓢形瓶 伊万里

江戸時代 (17世紀中期) (左)高 20.1 cm 口径 1.9 cm 底径 5.5 cm

胴の上半分は赤の亀甲文で埋め、丸く開けた窓絵には宝文を三方に分けて描く。胴体の下半分には、青・緑・黄色で余白を活かした山水文を描き、その上辺を赤い雷文で埋める。他の瓢形瓶にも類例があるように、頸の部分は竹の節をかたどり、胴に紐を結んだ飾りを施す。

以上を含む、約80点を展示予定。



展覧会概要

我国では近代に至り、食器などの道具としてではなく、また茶の湯の評価からも離れて、陶磁器を美的鑑賞の対象としてとらえる“鑑賞陶器”という観念ができあがります。その中で注目されたのが「古九谷」「柿右衛門」「鍋島」でした。以来、多くの愛好家が誕生し、研究も進められ、現在ではこれらはそれぞれ独自の魅力を放ちながらも、密接に連関したやきものであることが分かってきています。

「古九谷」については未だに産地論争がありますが、一部の作品は肥前地方で作られた伊万里焼の初期の色絵磁器であることには疑いありません。中国の五彩磁器の影響を受けて発展した濃厚な色彩、躍動感あふれる大胆な構図の古九谷様式の伊万里焼は、一方では輸出需要からヨーロッパ好みの軽やかな赤の色彩が主役の柿右衛門様式へと展開し、一方では将軍献上用に格調高く仕上げられた鍋島焼に技術が応用されていきました。

今展示では、肥前磁器の精華「古九谷」「柿右衛門」「鍋島」をご堪能ください。



展示詳細

◆それぞれの呼称とやきものの特徴

「古九谷」

「古九谷」とは、17世紀の中ごろに加賀の九谷村（現・石川県加賀市）で焼かれたやきものに対してつけられた呼称です。しかし窯跡の発掘調査が進むと、「古九谷」とみなされていた作品は、17世紀中期に肥前地方の有田（現・佐賀県有田町周辺）で焼かれた伊万里焼であることが明らかになってきました。この伊万里焼に対する「古九谷」の呼称が広く一般に定着していることをふまえ、名称の定義と産地のズレを解消するために、伊万里焼に対しては現在では便宜的に「古九谷様式」と表現しています。

色絵磁器を作っていない朝鮮半島からの技術移入を受けて生産のはじまった伊万里焼では、草創期には色絵磁器を作ることができませんでしたが、1640年代になるとその焼成が可能になります。この初期の色絵磁器が古九谷様式と呼ばれている一群です。これらは、当時日本に多く輸入されていた中国景德鎮窯の南京赤絵や漳州窯の呉須赤絵の影響を受け、中国風の絵付けが施されたほか、小袖などの和様のデザインを取り入れています。ダイナミックな構図に濃厚な色絵付けが施されているのが特徴です。

「柿右衛門」

17世紀半ばに始まった輸出事業にあわせ、伊万里焼はヨーロッパ向けの新様式を作り出します。これらの作品は国内に伝えられた数が少ないこともあり、近代の研究においてはその貴重な色絵磁器を、江戸時代から名を知られた名工・酒井田柿右衛門個人の手になるものと

して「柿右衛門」、「柿右衛門手」と呼びました。しかし、1970年代頃からヨーロッパに伝わった作品のいわゆる「里帰り」が盛んになったことや、ヨーロッパの東洋陶磁コレクションの実態が明らかになったこと、そして国内の窯跡の発掘調査が行われるなどの研究の進展から、現在では柿右衛門個人の作品ではなく、柿右衛門窯が牽引した伊万里焼の一様式であると考えられるようになりました、「柿右衛門様式」と呼ばれるようになりました。

ヨーロッパにおける需要に応えて作り出された柿右衛門様式の伊万里焼は、土型を用いた薄く精巧な造り、赤を基調とした華麗な色、余白をいかした瀟洒な文様などが特徴です。中でも高度な技術により作り上げられた「^{にごしで}濁手(乳白手)」と呼ばれる純白の磁肌をもつ作品は、柿右衛門様式の作品の中でも頂点に位置する最高級品といえます。

「鍋島」

佐賀藩鍋島家の御用窯において作られた、主に將軍や幕府高官への献上・贈答用に用いられた特別なやきものなどを、現在では「鍋島」「鍋島焼」と呼んでいます。佐賀藩の御用を承る御用窯が最初に設置されたのは寛永年間（1624～44）頃、有田の岩谷川内においてと考えられており、その後大川内山（現・伊万里市）に移転。どの時点から「鍋島焼」の生産が始まったとみなすかについては諸説分かれるところですが、大川内山時代の元禄年間（1688～1703）には鍋島焼は最盛期を迎えます。

最盛期の鍋島焼は、木盆形と呼ばれる深皿に高い高台のついた独特の丸皿を基本とし、大きさは尺皿（口径約30cm）・七寸皿（口径約21cm）・五寸皿（口径約15cm）・小皿（口径約9～11cm）の4種類のみ。絵付けに関しても、染付で輪郭線を描いた上に上絵付けを重ねる賦彩技法を徹底しており、上絵付けの色は赤・黄・緑の3色に限られています。そのほか、高台文様は櫛目文様を基本とするなど、全体的に文様の種類も限定的であり、その形・装飾に関しては厳格に規格化されていたことが分かります。抑制的効いた輪郭線に縁取られた文様は、献上品にふさわしい品格を醸しています。

◆それぞれのつながり

古九谷様式と柿右衛門様式

古九谷様式と柿右衛門様式は様式的差異が大きいことから、連続した時間軸の中で作られた伊万里焼でありながら、全く別のやきものに感じる、同じ伊万里焼とは思えないなどの意見が寄せられることがあります。もちろん、そこには産地論争の問題も意識されてのことでしょう。

しかし、古九谷様式が作られた17世紀中ごろと柿右衛門様式が作られた17世紀後半では、伊万里焼をとりまく環境は大きく変化しており、そうした背景からこの様式的差異の原因を考えてみると、作風に大きな変化が生まれるのは至って当然のことのようにも考えられます。

例えば、17世紀中ごろに作られた古九谷様式の伊万里焼は、一部は東南アジアなどにも輸出されていることが確認されていますが、基本的には日本国内向けの製品であり、大名屋敷で宴用の什器として用いられたものでした。それに対し、伊万里焼の輸出が本格化した 17

世紀後半に作られた柿右衛門様式の伊万里焼は国内に伝わる数が極端に少なく、多くはヨーロッパに輸出され、彼の地の王侯貴族の東洋趣味を大いに満足させた贅沢品でした。こうした受容者の違いは異なる需要を生み出し、伊万里焼の主流の作風が変遷していく契機となりました。

また、それぞれの様式を代表する典型的タイプの作品を比較すると様式的差異が大きく感じられますが、その間をつなぐ中間様式の作品も存在しています。現在では初期輸出タイプと呼ばれている作品群がそれにあたり、古九谷様式の濃厚な色使いを残しながらも、古九谷様式時代よりも素地は白く、より鮮やかな発色の赤の上絵を多用するように変化しており、柿右衛門様式の萌芽を感じさせます。



画像④

古九谷様式・柿右衛門様式と鍋島焼

同様に、有田とは山を一つ隔てた大川内山で作られた鍋島焼についても、古九谷様式、柿右衛門様式との関連性を見出すことができます。たとえば、最初に御用窯が築かれたという岩谷川内地区にある猿川窯は、古九谷様式の色絵素地片が出土しているだけでなく、高台内に目跡（焼成時の窯道具痕）を残さないなど鍋島焼と共通の特徴をもつ、言い換えれば草創期の鍋島焼ともいえる製品も発見されています。現在に伝わる作品の中でも特に前期の鍋島焼において、花などをかたどった変形皿が多いことや、濃厚な色使い、裏文様などに古九谷様式の伊万里焼との近似性を感じ取ることができます。



色絵 牡丹文 変形皿 鍋島
江戸時代 (17世紀後半)

また、元禄 6 (1693) 年に藩主より、佐賀藩の陶磁生産をつかさどる有田皿山代官に出された指示書「有田皿山代官江相渡手頭」には、有田の優秀な陶工を鍋島藩窯に引き抜くように、あるいは珍しい文様の伊万里焼があれば鍋島焼の参考とするためデザインを描き写して提出するようにとの指示が出されていることから、伊万里焼と鍋島焼の間には技術上・デザイン上の交流があったものとみられます。それを示すように、鍋島焼の中には、柿右衛門様

式の伊万里焼や柿右衛門様式に続いて打ち立てられた新様式・古伊万里金欄手様式の伊万里焼と近似した装飾をもつ作品を見つけることができます。



色絵 唐花文 台皿　伊万里
江戸時代（17世紀末）



色絵 菊唐草文 皿　鍋島
江戸時代（17世紀後半）

見込周辺のみ意匠化された花文をつなぐという構図が良く似た柿右衛門様式時代の伊万里焼と鍋島焼。染付による輪郭線を描いた上に色絵を加えている賦彩技法も共通している。

別々の魅力をそなえていながらも、相互に関連し合っている古九谷様式、柿右衛門様式の伊万里焼、そして鍋島焼のつながりをご紹介いたします。

※なお、概要の要約が必要な場合は以下の文章をご参照ください。

■ 15 word

肥前磁器の精華、約 80 点を展示。

■ 63 word

それぞれ独自の魅力を放ちながらも、密接に連関している「古九谷様式」「柿右衛門様式」の伊万里焼、そして「鍋島焼」を展示。約 80 点。

■ 184 word

中国の五彩磁器の影響を受けて発展した濃厚な色彩、躍動感あふれる大胆な構図の古九谷様式の伊万里焼は、一方では輸出需要からヨーロッパ好みの軽やかな赤の色彩が主役の柿右衛門様式へと展開し、一方では將軍献上用に格調高く仕上げられた鍋島焼に技術が応用されていきました。それぞれ独自の魅力を放ちながらも、密接に連関した肥前磁器の精華「古九谷」「柿右衛門」「鍋島」をご堪能ください。



展示解説

展示期間中、第2週・第4週の水曜日と土曜日に、当館学芸員による展示解説を行ないます。予約は不要です。入館券をお求めの上、ご自由にご参加ください。

■第2・第4水曜 午後2時～ (10月8・22日、11月12・26日、12月10日)

■第2・第4土曜 午前11時～ (10月11・25日、11月8・22日、12月13日)

※各回、約40分～50分ほどの解説になります。

※団体でご来館のお客様への展示解説も承っております。電話(03-3465-0070)による事前予約制。

お気軽にご連絡くださいませ。



外国語展示解説 (中国語・英語)

展示期間中、当館スタッフによる外国語の展示解説を行ないます。

参加ご希望の方は、事前に電話または当館ホームページよりお申込み下さい。

■中国語 10月 19日(日) 午後2時～

■英語 10月 18日(土)、11月 22日(土)、12月 13日(土) 午後2時～

※お申込み先：03-3465-0070

外国語展示解説申込みフォーム：http://www.toguri-museum.or.jp/english/museum_tours/

※ご希望により隨時外国語ミュージアムツアーを承りますので、お問い合わせ下さい。



メモリアルデー

10月14日(火)は創設者故戸栗亭メモリアルデーとし、終日入館料無料と致します。

※10月15日(水)は振替休館とさせていただきます。



戸栗美術館 概要

戸栗美術館は、当館創設者・戸栗亨が長年に渡り蒐集しました陶磁器を中心とする美術品を永久的に保存し、広く公開することを目的として、1987年11月に、旧鍋島藩屋敷跡にあたる渋谷区松濤の地に開館しました。コレクションは伊万里、鍋島などの肥前磁器および中国・朝鮮などの東洋陶磁が主体となっており、日本でも数少ない陶磁器専門の美術館として活動しています。



会場：戸栗美術館

開館時間：10:00～17:00（入館受付は16:30まで）

休館日：月曜日

※月曜祝日の場合は開館、翌日休館のため、10月13日、11月3日・24日（月・祝）は開館、翌11月4日・25日（火）は休館。

※ただし10月14日（火）は特別に開館、翌10月15日（水）を振替休館といたします。

入館料：一般 1,000円/高大生 700円/小中生 400円（団体20名様以上で200円割引）

交通：渋谷駅ハチ公口より徒歩15分／京王井の頭線 神泉駅北口より徒歩10分

※当館には駐車場・駐輪場はございません。

■Youtube 戸栗美術館チャンネル

<http://www.youtube.com/channel/UCGsnhei61hDkvDQIftWy9ZA>

■次回展示予定

2015年1月6日（火）～3月22日（日）

『江戸の暮らしと伊万里焼展』



■展覧会に関するお問い合わせ
公益財団法人戸栗美術館
広報担当宛て

〒150-0046 東京都渋谷区松濤1-11-3
TEL: 03-3465-0070 FAX: 03-3467-9813
URL: <http://www.toguri-museum.or.jp/>
E-mail: kouhou@toguri-museum.or.jp



アートサークルのご案内

陶磁器に親しみ、美術館をより楽しんでいただくために、会員制のアートサークルを設けております。1年間何回でもご入館いただける他、さまざまな特典もご用意しております。

年会費 ￥5,000（税込）／発行から1年間有効

特典① 入会から1年間、何度でもご入館いただけます。

特典② ご入会時に戸栗美術館オリジナルグッズをプレゼント。
(はがき5枚、A5クリアファイルのどちらかをお選びいただけます)

特典③ 企画展ごとに会報「戸栗美術館だより」、入場招待券2枚、展示ご案内チラシを送付いたします。

特典④ 展示ごとに陶磁器の専門家による特別展示解説にご参加いただけます。
開催日時は会報でお知らせします。
(所要時間約1時間、要予約・定員制・先着順)

特典⑤ 会員様を含めた3名以上の団体様は、学芸員による展示解説〈ミニツアー〉を受ける事ができます。（随時予約受付、所要時間約30分）

特典⑥ 各展示に1回月曜休館日に開催される特別講座にご参加いただけます。
開催日時は会報でお知らせします。
(参加費1500円、所要時間約4時間、要予約・定員制・先着順)

特典⑦ ミュージアムグッズを価格の1割引きでご購入いただけます。
(一部除外品あり)

特典⑧ 年末に当館オリジナルカレンダーをお送りいたします。

特典⑨ 有効期限内のご更新は、4,500円です。
(期限を過ぎてのご更新は新規ご入会と同じく5,000円となります)。